

第4回 「子母澤寛文学賞」（短編小説部門）【大賞】

「壬生の風」
みぶかぜ
大阪府
出雲
いづも
遙
はるか

哀しみの果てというものはこの世にあるのだろうか。宮城県気仙沼市まで来て京都府警
けいぶほ こさかゆうさく
けい ぶほ みやぎけんけいせんぬまし
きょうとふけい

既に四月も終わろうとしているのに浜風が混じり合つためか、東北の朝五時は厳しく冷える。見渡す限り気仙沼に峻嶮な高い山は見えないが吹き下ろすような冷氣も肌を包み、その寒氣で我に返る。(京都の比叡風でもこんな寒さはないで;) ブルッと身体を震わせて独りごちた時、隣に人の気配を感じた。

「ううつす、小坂小隊長。しようたいちよう早いでんなあ」
「ちた時、隣に人の気配を感じた。

そり抜け出して洗顔^{せんがん}に来たつもりだが、大島も勇作と同じように寝つけなかつたのだろう。

「おお。冷たあ。全く。お湯で洗いたいわ」

「文句いうな。被災者さんのことを考えよ」
もんく
ひさいしや
おも

「…そうでした。すんません。ああ、そういうえばもう十人も並んでますわ。
安置所に」あんちじょ

「えつ？ もう並んでるんか。行政職員は？」

「こんな時間に来てませんわ。彼らも被災しますからね。うちの若い衆を出してます」

「対応しろ。粗相のないようにな。それから部隊員は会場の洗面所は使うな。被災者さん そそう ぶたいいん せんめんじょ

専用や。俺おれらはこの小川で十分やからな」

顔を拭くのも早々に勇作は安置所に足を向けた。闇の中を玄関前に張り出された行方不明者安否情報を食い入るように見つめる被災者がいる。その中には勇作が顔見知りになつた老齢ろうれいの男性もいた。勇作の顔を見るなり、ほつとしたように皺しわだらけの顔を綻ほころばせた。

「おお。新選組しんせんぐみの隊長さんよ。昨日の夜はこれだけかい？ 上あがつた遺体はよ？」

「はい。七名。年配ねんぱいの方が七名ですよ」

男性は津波にさらわれた孫を探して気仙沼だけでなく、他の地区まで安否情報を記載きさいされたご遺体の特徴とくちょうを確認に足を伸ばしていたが、最初にやつてきたのがこの安置所だつた。

初対面の時には勇作の腕に着けられた京都府警の腕章わんしょうを見て、わざわざ京都からかい、お世話様せわさまだねえ、と頭を下さげてくれたものだ。

「京都府警といや、元もとを正ただせばご先祖せんぞは会津藩あいづはんお預あずかりの新選組しんせんぐみだよな。東北とうほじや新選組しんせんぐみは人気にんきあんだよ。お世話様せわさまだねえ」

そういつて手を握にぎつてくれた。

幸いというべきか勇作は、幕末に京洛きょうらくの地で名を馳せた新選組しんせんぐみが兵法へいほうや剣術けんじゅつの訓練所くんれんじょを置いていた京都の壬生寺みぶでらや屯所どんしょだった八木邸やぎていをよく知つていて、壬生寺みぶでら一帯いつたいを管轄かんかつする中京警察署員なかぎょうだからだ。壬生寺の境内こころは広々としていて季節を問わず、吹き抜ける風が心地良くて散策さんさくするのも好きだつた。それに管内の勉強がてら新選組関係の本も何冊かは読破どくはしていたから予備知識よびちしきもある。まさか京都から遠く離れた東北で自分のことを新選組の隊長であといつてくれる人に出逢うとは思わなかつた。

「駄目かな…もう、ひと月だもんな」

肩を落とす老人に安易な言葉は掛けられないが、知り得た名前で呼びかけることはできる。

「松島さん。ここは寒いですよ。ストーブつけるから待合室に入つて待ちましょうか」

玄関前で勇作に敬礼する部下の山脇総一巡査に声をかけた。山脇は勇作とは別の警察署から派遣された部隊員で地域課の交番巡査だが、機転の利く若手の警察官だ。

「早いが待合室にストーブを焚いてくれるか」

「了解。先に暗幕をかけますね」

「そうしてくれ。絶対に中は見せないようになつたい」

山脇が安置所内を区切るブルーシートを覆うまで勇作は被災者達に昨日までのご遺体の情報を伝え続けた。被災者は落胆と安堵の表情を浮かべる。勇作には痛いほど分かつた。被災者には家族がご遺体で発見される絶望と万が一の生存を信じたい希望が交錯するのだ。

「小隊長。暗幕完了。ストーブつけました」

「おお。ほんなら皆さん、中でお願いします」

勇作の案内に若い女性がクスッと笑った。

「小隊長さんの『ほんなら』って、よくテレビとかで聞く関西弁と同じなんですね」

勇作がお国言葉を使つたことに他の被災者達もドッと笑つた。松島老人も、「俺は大阪で

新喜劇見たことがあんだよ」と笑い、「ほんなら、つて舞妓さんが使うんだよね？」小隊長さん」という人もいて、東の間だが和やかな雰囲気が安置所の玄関に訪れた。それは開場時

間を早めて待合室にストーブを焚いたことへの被災者達の感謝と優しさなのだろう。

笑顔の被災者を眺めながら今日起きた時に考えたことがまた勇作の脳裏に甦った。

(哀しみの果てにおられる被災者達って何でこんなに人に優しくなれるんだろう…)

三・一 東日本大震災が発災して約一ヶ月が過ぎた頃、京都府警の警察署で警備係長として勤務する勇作に府警本部から宮城県気仙沼市への災害派遣の命令が下された。

「先に出た第一陣は疲労困憊でな。警察庁からの府県警の割当もある…若い隊員をつけるから引率して行つてもらえんやろうか」

口籠もる本部の補佐からの電話に、行かせて頂きます、と即答したのは当時、戦後最大の国難とまでいわれた事実と同時に警察官としての使命感からだた。それがもしも勇作以外の警察官だったとしても即座に現地への派遣を即答していただろう。警察官の習性だ。

既に発災と同時に人命救助任務の第一陣は派遣され、府警にも既に生存者は絶望的との情報が入ってきていた。その意味するところは第二陣には人命救助以外の新たな任務が課せられることになるということだ。恐らく地震と津波で不明になつた犠牲者の海岸検索が俺達の任務になるだろうと勇作は予想した。

心強かつたのは派遣部隊員名簿の中に階級が勇作と同じ警部補の大島の名を見つけたことだつた。四十歳の勇作より五歳下の大島は剛毅な性格で勇作とも気心が知れている。今回の第二陣では勇作と大島が指揮官となる。警部補二人で十八人の若い部下を的確に指揮しろというのが府警本部の命令意思だつた。

警察学校からの派遣部隊の出発式は警備部長以下、同僚や家族までもが総出となつての盛大な見送りだつた。同僚達は期待と羨望、家族は無事の帰還を願つての祈るような眼差しだ。

その中には勇作の妻である悦子と娘の里沙も手を振っていた。現地ではまだ烈しい余震が続いている。家を出た朝にも心配そうな顔で見送った悦子の横で小学校四年生の里沙が勇作の後ろ姿に向かつて叫んだ。

「お父さん！ 東北の人を助けてあげてね！」

拍手で見送る列の人出に車内から敬礼で応えた時、視線の端に里沙を捉えた。きっとまた朝と同じ言葉を里沙は叫んだだろう。やがて視界が人の影を離れ、勇作の心は早くも被災地へと向かつていた。

バスで車内泊を続けた二日目に磐越自動車道を越えた辺りから地震で陥没した道路の亀裂でバスのタイヤはバースト寸前になり、何度もタイヤ交換を行つた。それよりも部隊員の誰もが息を呑んだのは眼前に拡がる惨状だった。最初は海岸線に出たのだと思つたがそれは錯覚でバスが走る道は内陸だつた。見渡す限り建造物が見当たらなかつたことが海岸線を走つていると見誤まらせたのだ。押し寄せた津波が山手に到達した後、更に引き潮に続く第二の上げ潮を呼び込み、倒壊家屋は真横に晒されて周囲には怪物としか形容できない瓦礫が汚泥と共に満ちていた。瓦礫の隙間には警察や消防、自衛隊が蟻のように捜索している姿が見える。家屋に印された○印の赤いカラー・マーカーも目立つていた。この家屋の中は搜索済みだというサインだ。その中には犠牲者がいたに違いない。赤いサインは勇作達が向かう気仙沼に近づくにつれて数が増えていった。

「小坂小隊長。こりや、えらい試練でっせ」

大島が勇作の席まで来て囁いた。

「けど。地獄じやあるまいし。捜索して一人でも多く家族に返してあげましようや」

大島が何気なく口にした試練と地獄。後にその現実を思い知らされることになった。

予想に反して現地の指揮官会議で京都部隊に下された任務は不明者の検索任務ではなく、遺体安置所での遺族支援任務だった。

遺族支援とは安置所に搬送したご遺体を刑事部が検視した後で納棺し、遺族が行う仮葬儀に立ち会うことや身許が判明しないご遺体の特徴と所持品が書かれた安否情報を確認した遺族が、ご遺体と対面を行う際に寄り添うことが任務だ。警察官歴の長い勇作も大島も遺族支援任務は経験したことがない。会議終了後、一抹の不安が勇作の胸によぎつた。

「京都班の方には地元県警の連絡係を着けます。大変な任務ですがどうかお願ひします」

宮城県警の補佐から紹介されて、勇作と大島の前に来たのは無精髭が伸びて疲れ果てた感じで小太りの巡回部長だった。

「森下です。よろしくお願ひします。遠くからお世話様です。早速ですが現場の実査を」
大島が森下を労るよう声をかけた。

「部長のお家も被災されたんでしょう。僕らが何でもやりますよ。何でもいって下さい」

森下は目を見開き、無言で二人に頭を下げた。厳しい寒さもあって北に住む人々は無口だと聞いたことがある。大島の言葉は勇作を代弁していたが更に心の中で付け加えた。この人達のためにも俺達は何でもするんだ。

車の中で大島がもう一度遠慮気味に聞いた。

「部長の被災されたお家は近いんでしょうか」

「まあ：けど、みんな被災はしますから」

森下は口を濁すように運転に集中した。

安置所に到着した時、勇作が想像していた理想は現実の前に打碎かれた。案内された安置所では検視する区画と納棺する区画をブルーシートで区切っている。検視の模様はとても被

災者には見せられないからだ。刑事部員が警察医と共に検視を務めた後、行政職員が用意した祭壇の前にご遺体を棺に収めて安置してある。棺は所狭しと並べられ、壁に張られた安置情報を確認した遺族が遺族支援班員の立会いのもとで我先にと遺体と対面していた。

勇作と大島の前にあるのは哀しみの極地だ。悲鳴、号泣、慟哭と遺族感情は人それぞれに違つた。ご遺体を目の当たりにして、「うちの子だ」「俺の親だ」と泣き崩れ、それでも発見された事実に安堵する遺族もいれば、立ち会う行政職員達に向かって、

「違う！ これはうちの子じゃないっ！ うちの子は絶対にどこかで生きてるんだっ！」
と頑なに認めない遺族もいた。

かつて経験したことのない暗く重厚な空気に勇作は圧倒されたが、傍らに目をやると大島が手にしたノートへ熱心にメモを執つている。こんな時の大島は大胆なようで実は緻密だ。

「部隊員への任務付与です。玄関受付に二人を配置させます。遺族を整列させるロープも

張りましよう。順番抜かしは揉めますから。搬送されたご遺体を納棺する者は五人もいれば。

それから、あと一番大事な任務ですが…」

やっぱりこいつは頼りになる。同じ警部補だが俺を立てる言葉さえ冷静だ。これから始まる任務は部隊員にも相当の精神的なプレッシャーがかかるだろうが、大島のような組織内ナ

7

ンバー・ツーがいれば引き締まる。

「分かってる。遺族への直接対応は俺が行う。行政職員への対応もな。連絡係の森下部長は時々でいいからアドバイスを下さい」

「いえ。小隊長。私も納棺か受付を…」

大島が森下の肩に手をかけた。

「森下部長は不眠不休でしそう。安置所の裏手に待機室がありましたね。どうしても部長にお願いせなあかんことが必ずあります。その時だけお願いして待機室で休んで下さいよ。同僚愛に府県警の壁はあらへんから」

大島の最後はおどけた発言に森下の瞳は潤んだが、いつしか憧憬のような色が現れた。

「やつぱり…」

「えっ？」

「いや…俺は歴史小説を読むのが好きで…」

「歴史小説？」

「新選組？ 俺らが新選組なんですか？」

「派遣部隊が京都府警だと決まった時にね。京都府警だとやつぱり新選組だなど…」

「はい。そう。京都守護職会津藩主中将（左近衛權中將）お預りの新選組は京都府警の魁じやねえすか。しかも、しかも…」

「しかも？ どうしたんです？」

派遣部隊員名簿を見て…小坂勇作さん。大島歳行さん。お二人の小隊長さんの名前が。新

選組局長の近藤勇の勇、副長の土方歳三のトシって字が入ってて：新選組は誠の一字で彼らなりに武士道を貫いたんです。お二人とも誠実だ：いや、こりや私の心の中だけの勝手な偶然で。すみません。変なこといつて」

無口な森下がこれだけの言葉を紡いだのだ。

奇貨（めつたに得られない機会）とすべきだろう。遠回しで朴訥な森下の言葉は二人の心を温めた。なるほど。確かに京都府警本部の近くには幕末の会津藩邸跡の碑もある。勇作はこの素朴で愛すべき男のために興に乗つてやろうと決めて大島に目配せすると我が意を得たとばかりに笑つた。

「俺も新選組なら少しは知つてますんや。ほんなら今日から俺達三人の中だけで呼び名を決めましよう。小坂さんは局長。で、私は副長。森下さんは…そうやな、ナンバー・スリーの山南敬助（※）は総長。総長なんてどうですか」

「おお。山南敬助な。いいやないか。総長か」

「いやあ。こりや参りましたよお…」

東北の警察官も多く被災している。彼らは家族を想いながら歯を食い縛つて捜索や遺族支援に奮闘しているのだ。明日から、いや、今から俺達が身体を張るんだと勇作は誓つた。

そんな出会いから勇作が率いる京都部隊は派遣期間の半分となる一ヶ月近くが経つた。

勇作達は出動服の上から検視用の簡易エプロンを着けて納棺作業を行つた。エプロンは

すぐに血だらけになつたが代わりのエプロンなどはない。一日の作業が終わつてから小川の水でエプロンと長靴に飛び散つた血を流して使い回した。代わりがないのはエプロンだけで

はない。簡易マスクも手袋もだ。だが誰も文句はいわなかつた。ただ夜間に京都府警本部に電話で定時報告する時に、「感染症には十分配意しろ」と言われたが勇作と大島は鼻で笑つた。この地獄のような現場を一度でも見に来たらいいと思つていたからだ。

遺族支援ではあの松島老人が孫の男の子のご遺体と哀しい対面を果たした。覚悟ができていたのだろう。一緒に対面した孫の両親は悲嘆に暮れていたが、松島老人は紫の房がついた数珠を手に静かに歩み寄つた。

「隊長さんよ。何とか見つかつたよ。辛いねえ。順番が違うだらうになあ……だけどよ。隊長さん達はよ。縁もゆかりも何んにもねえ、こんな遠くまで来てくれてよ。本当にお世話様だつたねえ。あんた方もな。うちに帰つたら家族を大切にしてくれ。無事に京都に帰つてくれ。お世話様でした」

皺だらけの手を勇作が両手で握ると紫の房が小さく揺れた。その時に勇作の脳裏に里沙の言葉が聞こえた気がした。

(お父さん！ 東北の人を助けてあげてね！)

小さな棺を車の後ろへ静かに安置した後で、車内で遺影を抱く松島老人が頭を下げる姿に勇作は部隊員全員を整列させて見送つた。

「松島さんにい！ 敬礼つ！」

車が見えなくなつた時、ポツンと呟いた。

(ごめんな。助けてやれなかつたよ)

最初は戸惑うばかりだつた遺族支援も、また、よそよそしかつた安置所を訪ねてくる遺族

も、顔馴染みが増えてくるにつれて勇作達に協力的な態度を示してくれるようになった。

それは勇作と大島の指揮能力の高さもさることながら若い部下達と一緒にになって誠実に被災者と向き合つてからだらう。

「小坂小隊長。進言していいですか」

若手の中でリーダー的な山脇巡査がバスの中で休憩する勇作に話しかけてきた。

「おお。何や?」

「いえ。安置所のトイレのことなんですが」

「トイレ? ドイレがどうかしたか?」

「はい。実は男性トイレの清掃は安置所が閉場して夜に僕らがしてるんですが、女性トイレが…さつき女性の被災者さん達が話してるのを聞いたんです。酷いことになつてるって。行政職員さんも女性がいないんです。それで良かつたら僕らが掃除していいでしようか」

山脇がいうトイレ掃除の意味が分かった。

安置所内のトイレは被災者専用で部隊員は安置所からかなり離れた公園にある落とし蓋のトイレを使つてゐる。小高い丘の上に位置する安置所は少量の水は出るもの何度も断水が続き、慢性的な水不足で部隊員は洗顔なども近くの小川で済ませていた。

「それはいい提案だが男性トイレの清掃用の水はどうしてた?」

「はい。小川からバケツで汲んでます」

「そうか。ご苦労だけど頼むな」

「了解。では今日から清掃します」

バスのステップにいた森下が勇作と山脇のそんなやり取りを聞いていたらしい。

「そんなことまで：申し訳ないですねえ」

「いいんですよ。若い奴も色々と考えてくれてるらしい。それにお互い様だから」

森下は安置所に向かう山脇を見ていった。

「あの山脇君も新選組ですよねえ」

「ははっ。総長は本当に新選組ファンやなあ」

「いや。山脇君はね。被災者の子供達から凄い人気があるんですよ。いつも子守り代わりに遊んであげてるんですよ。安置所に来るお母さん達がどれだけ助かってるか。本当に人に對して誠実に接してますよ、彼は」

「そうなんですか。初耳だな」

「はい。いつだつたか段ボールを破つてマジックペンで絵を描いてあげてね。子供達を集めて紙芝居してましたよ。小坂小隊長、知つてましたか？ 新選組一番隊長の沖田総司は子供と遊ぶのが好きで有名だったんですよ」

それは勇作も聞いたことがある。京都の壬生寺辺りでは昭和期初めに、古老になつた人々が早逝したこの天才剣士が寺の境内で子供達と無邪気に遊んでいたという言い伝えを残しているらしい。

「そりや、本当にまるで沖田総司だね」

「俺もそう思いましてね。しかも：」

「しかも、しかも。わかつてますよ。山脇総一という名にも沖田総司の総の字がある…森

やまわきそういち

下総長が『しかも、しかも』つて口にしたら必ず新選組に関することなんだから

「参ったな、でも本当に不思議でしょう」

バスから去つて行く森下を見送った後で勇作は思った。本当はこじつけなのかも知れないが、小さなことでも人が嫌がるトイレ掃除を買って出した若い隊員の姿勢は嬉しかった。

また、それを新選組の旗頭に掲げた誠の一字にかけて山脇を誠実だといつてくれた森下の言葉にもだ。考えてみれば発足当時の新選組は風雲に乗じて一旗揚げようと京の都に馳せ集まつた浪人集団だったが、幕府から押しつけられるように京の治安を任じられた会津中将松平容保の命を受け、幕府転覆を謀る不逞浪士を取り締まつた。殺戮の多さから京の人々からは壬生浪と蔑まれ、討幕派から恐れられても彼らはただ幕府に忠誠を尽くした。士道に背く者は切腹という凄まじい局中法度で鉄の規律を誇り、農民や商人の出身が多くた新選組は最期まで武士であろうとした。

バスを降りて南の方角に目を移した。安置所のある場所からは木々があるだけで遠くは見渡せないが、この先にあるのが福島県だ。そこにも鳥羽伏見の戦いに敗れた新選組が再起を図るべく転戦した激戦地がある。

(誠か。昔は忠誠という意味だつたんやろな)

松島老人や森下のいう新選組の末裔である現代の京都府警はどうか。確かに警察官は上意下達の社会だから組織には忠誠でなければならぬが、森下が例えた誠実という言葉の響きとは異なるようと思える。

山々の霞む稜線眺めているうちにやがて胸に一つの答えが浮かんだ。今の遺族支援は

任務ではない。人間として寄り添うのだ。家族や友人を津波で地震で亡くし、住む家さえも流された被災者に俺達ができるのはただ寄り添うことなのだ。

今度は勇作の眼に山の稜線がはっきりと見えてきた。確かに災害派遣が終われば俺達は帰任して元の日常に戻る。だが遺族や被災者はここで生きていかなければならない。だからこそ残された時間の最後の最後まで一人の人間としての寄り添いを続けよう。誠実にだ。それが誠^(まこと)というヒントを与えてくれた俺達の先祖、新選組に報^(むく)いる道だと暮れなずむ夕日の中で勇作は思った。

派遣期間もあと一週間となり、収容したご遺体が百体を超えた頃、それは起こった。

「何度も何度も言わせるなっ！ あれはうちの子じゃねえんだよっ！ うちの子はなあ、絶対にどこかで生きてるんだ！」

勇作と大島が振り向くと困惑した表情の若い行政職員と、見るからに腕^(うで)つ節^(ぶし)の強そうな男性が言い争っていた。周^(まわ)りにいる安否確認に来た被災者達も固唾^(かたず)を呑んで見守っている。

男性は梅川^(うめかわ)という漁師^(りょうし)で安置所が設置されて直ぐに行方不明になつた中学生の長男の確認に日参していたが、発災から二週間が経つて「梅川」とネームが入つた制服を着た身体的な特徴^(とくちよう)も長男と合致するご遺体が発見された。親戚全員もご遺体は梅川の長男に間違いないと確認する中で、父親の梅川だけは頑として認めずに今日も安否確認に来ていた。

「梅川さん。遂に切れましたねえ。そりや気持ちは分かりますけどね。そやけど後はDΝA型鑑定を待つしかありませんやんか」

傍らで勇作に大島が囁くようにいつたが勇作の足は梅川と行政職員に向かつていた。

「梅川さん」

「何だ」

「ここには他の行方不明の方を捜して悲嘆に暮れておられる被災者さんもおられます。大きな声を出されると…」

「へっ！ 偉そうなこといってらあ。新選組か何か知らねえがな、おめえらはいつもここで遺体の番をしているだけじゃねえか。誰一人として助けてねえじやねえか。おめえらも海まで行つてみろ。行つて俺んとこの坊主を捜索してこい！」

梅川はさらに毒づいた。

「おめえらはあと何日かしたらお役御免で家に帰るんだ。けどなあ、ここにいる者達はよ。ずっと家族を捜さなきやいけねえんだよ！」

見かねて横から何かをいおうとして踏み出した大島を勇作は手で制した。

「梅川さん。私達が京都を出発した日にね。私の娘が叫んだ言葉があるんです。聞いてもらえますか？」

訝しげな眼の梅川の前で勇作は眼を瞑つた。

一瞬、里沙のあどけない顔が浮かんだ。

「お父さん！ 東北の人達を助けてあげてね！」

叫んだ勇作の声が安置所に木靈した。震わせた叫びで居合わせた被災者達だけでなく、納棺の作業をしている警察官さえ手を止めた。

梅川も目を見開いて固まっている。

「でもね。梅川さんのいわれた通りでした。誰一人として助けることはできませんでした。

私達にできるのはご遺族への寄り添いだけなんです。確かにこの任務が終われば私達は被災地を後にします。それでも最後の最後まで皆さんに寄り添うことはやめません」

海からの恵みだつた白い波は黒濁した不気味な津波に変わり、東北の地を覆い尽くすだけではなく人々を沖へと浚つた。変わり果てた姿となつて帰つても刻は戻らない。

勇作はすぐ隣りで風を感じた。森下がふわっと前に出て梅川に静かに語りかけたのだ。

「俺は認めたよ」

安置所の全員の眼が森下に向けられた。

「うちの長男と長女だ、別々に見つかつた。だからよ、俺はあんたの心の中が痛いくらいわかるよ。うん：痛いぐらいにな」

森下は天を仰いで歯を食い縛つた。

「だつてよ。眼の前にいるんだ。父ちゃん、俺、私、ここだよつて。我が子がそういうんだ。抱きしめてやるのが親だろ？ 違うか？」

総長、と呟いた大島が森下の背を撫でた。

「縁もゆかりも何もねえ京都から来てくれた人達がな。たとえ短い期間でも寄り添わせて

下さいって誠実にお願いしてゐるんだ。まるで誠一字の新選組だよ。そだろ？ 梅川さん」

森下が梅川の背に手をかけた。やがて森下と手を握り合つて共に泣いた梅川は、俺の子だ、といって棺にすがつた。その姿を見ながら勇作は別の想いを抱いていた。さつき森下が横に来た時に感じたふわっとした風のことだ。あれは初めての感触ではない。一体どこで感

じたのだろう。

京都部隊の派遣期間も最後の当番日を迎えた。勇作と大島がバスの中で仮眠時間削つて手書きで作った引継書も完成した。
ひきつぎしょ

引継書には被災者や遺族支援任務に関する注意点を仔細に綴つた。遺族心情に則して親身に寄り添うこと。また安置所での悲惨な状況から部隊員が我が事と捉え過ぎず代理被害を受けた場合は幹部が必ずケアすることなどを印した。府県は違つても全国警察の気持ちは一つだ。俺達の後に来る派遣部隊も必ず被災者や遺族に寄り添つてくれるだろう。充血した眼で引継書の表紙に大きく「誠」と書き終えた時、山脇巡査がバスに乗り込んで来た。

「さつき県警本部から連絡がありました。明日の離任に森下部長は来られないそうです：明日、子供さんの葬儀だそうです」

「そうか。分かつた」

昨日、森下は名残惜しそうに、「局長とも副長とも明日でお別れですねえ」といっていたが葬儀のことは何も告げなかつた。短い間だつたが、きっと別れが辛かつたのだろう。

「あの。小坂小隊長」

山脇は勇作を真っ直ぐに見つめた。

「私は人に寄り添う任務を経験して決めました。警備課の専務員になりたいです」

凛とした眼。山脇は東日本大震災の現場を経験して期するものがあつたのだろう。

「そうか。それは警備陣営の者としては嬉しい限りだ。京都に帰つたら警備専務員試験を

受けてみろ。俺が教えてやるよ」

「はい。ありがとうございます！」

軽やかな足取りの山脇を見送つてから勇作もバスを出た。夕陽が眩しい山の稜線も今日が見納めだ。引継書を纏めながら派遣期間に考えていた二つの疑問が解けた気がした。被災者や遺族の人々を見つめながら想つた哀しみの果ての先にあるのは人の優しさではなかつたか。手を握つてくれた松島老人。森下と抱き合つて泣き、最後は俺の子だと棺にすがつた梅川。哀しみの中で人への希望を忘れない人達がいた。そして梅川が勇作にお前達も捜索してみろと叫んだ時、勇作の前に立つた森下が感じさせた、ふわりとした風の意味。

あれは壬生の風だ。季節を問わず壬生寺の境内を吹き抜ける風。近藤勇が、土方歳三が、沖田総司が、山南敬助が受けただろう壬生の風が森下を通じて運ばれてきた。誠実であれと鼓舞する風なのだ。勇作はそんな気がしてならなかつた。その風を持つて京都に帰ろう。里沙との約束は叶えられなかつたけれど、ほんの少しは人の心を助けられたかも知れない。

離任の日にはバスの中で制帽の庇に手をかけて敬礼する勇作を始めとする京都部隊を多くの人々が拍手で見送つてくれた。地元の県警関係者だけではなく、この地で顔見知りになつた人々も駆けつけてくれた。山脇巡查と一緒に遊んだ子供達は「やまわきさん。ありがとう」とマジックペンで書いた段ボールを掲げている。瞳を潤ませた松島老人も、お世話様あ！と叫んでいる。頭を深く下げて見送つてくれる梅川の姿もあつた。二ヶ月前に派遣されたばかりの頃は誰一人として知らなかつた被災地で、今はこんなにも多くの人が拍手で見送つてくれる。勇作は車内から敬礼で応えながら、この光景をずっと胸に刻んでおこうと思つた。

やがてバスが高速道路の入り口に差し掛かろうとする頃、勇作の席の後ろに座っていた大島が、あれ…？と呟いた。

「小坂小隊長！あれっ！あれっ！」

勇作が前方に眼を凝らすと白い布の幟り旗のようなものを振っている者がいる。

「森下はんやつ！あれ、森下総長でつせー」

白い旗の中央には黒い字で誠の一字が翻つていた。その下に泣き笑いの顔をした森下がいる。左手で大きく旗を振り、右手は挙手の敬礼を送っていた。

涙声の大島が叫ぶ。

「運転手っ！減速や！ゆっくり減速せえ！」

バスは緩やかに幟り旗の前を通過する。もう涙で声にならない大島の目配せに、勇作も反応し、部隊員に敬礼の号令をかけた。

「森下総長にい！敬礼っ！」

さつきの大島の大声に負けじとばかり勇作はありつたけの大声を出したつもりだったが、裏返った声しか出せなかつたのは勇作も涙を堪えたせいだった。

森下総長が左右に振る誠の旗は、京都部隊に爽やかな風を送つてゐるよう見えた。

(※) 「山南敬助」の苗字は「やまなみ」のほかにも「さんなん」と呼ばれていたようです。
最近の研究では「さんなん」が正しいという説が有力です。